慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポスト高度経済成長期の都市空間とサブカルチャー： 中野ブロードウェイの「サブカルチャー化」を事例として
Sub Title	The relationship between urban space and subculture in Post-High economic growth period
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.83- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポスト高度経済成長期の都市空間とサブカルチャー

――中野ブロードウェイの「サブカルチャー化」を事例として――

The relationship between urban space and subculture in Post- High economic growth period

塚田　修一

１．問題の所在と先行研究の検討

（１）

本稿は、東京都中野区の JR 中野駅北口周辺をフィールドとして、ポスト高度経済成長期における都市空間とサブカルチャーとの関係性を把握・記述する試みである。

中野は現在、秋葉原と並ぶとも劣らない、サブカルチャーの中心地として知られている。その中枢をなしているのが、JR 中野駅北口に位置する中野ブロードウェイ（以下、中野 BW）である[1]。中野 BW は、正式名称はコープ・ブロードウェイ・センターで、東京コープ株式会社によって 1966 年に建造された地上 10 階地下 3 階建ての複合ビルであり、低層階は商業施設、中・高層階は集合住宅となっている。JR 中野駅北口とは、中野サンモール商店街を通じて繋がっている。2014 年現在、この中野 BW は、全体の店舗数のうちサブカルチャー関連の店舗が約 4 割を占める「サブカルチャーの聖地」である。（表 1：日本経済新聞電子版 2014 年 2 月 8 日「「迷宮」中野ブロードウェイ、アキバ超え成るか？」より）。

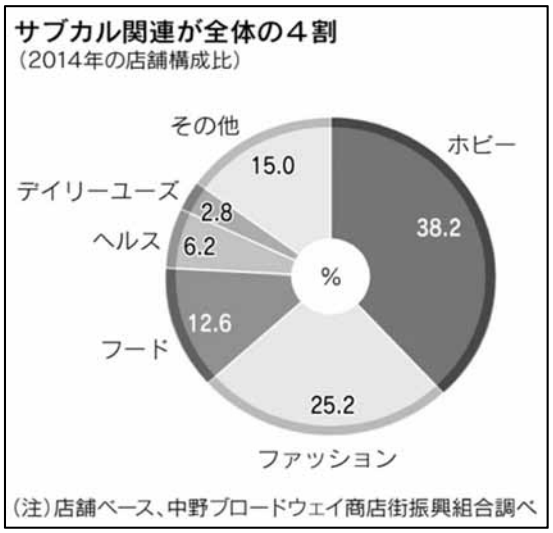

表 1

しかしながら中野 BW は、建造当初は「高級マンション」として売り出されており、また「流行最先端のファッションビル」であった。「館内ではヒールを履いた淑女と、インポートブランドのジャケットに身を包む紳士が闊歩した。70 年代に差し掛かる頃には、テナントは銀座や渋谷にも引けを取らない高級ブティックでビッシリと埋まることになる。「銀座かねまつ」や「成木屋」といった高級洋品店をはじめ、「ジュン」や「ロペ」などの若い世代に人気のショップも、中野から流行のファッションを発信していた」（『TO mag 中野区』:32-37）。

塚田修一「ポスト高度経済成長期の都市空間とサブカルチャー―中野ブロードウェイの「サブカルチャー化」を事例として―」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）83-96 頁

その中野 BW が、いつ、いかなる条件によって「サブカルチャーの聖地」となったのか。本稿では、中野 BW が位置する JR 中野駅北口周辺の社会 - 経済状況および中野 BW 内部の条件の考察を通して、この疑問に対する解答を試みる。こうした本稿の作業は、ポスト高度経済成長期の日本社会における都市空間とサブカルチャーの関係性の、新たな視座による記述である。

（2）

まず用語の定義を行なっておこう。周知のように、サブカルチャー研究は、ウィリス（Willis 1977＝1996）やヘブディジ（Hebdige 1979＝1986）による優れたエスノグラフィーにおいて成熟を迎えるが、そこに於ける「サブカルチャー」は、不良少年である＜野郎ども＞の反学校文化や、モッズ、パンクといった、「対抗文化」を指していた。しかし、それによって、現在の日本的な文脈における「サブカルチャー」を理解することはもはや難しい。そこには「対抗文化」のみならず、「若者文化」や、「マンガ」・「アニメ」、「オタク文化」も含まれており、それらについての語りも様々である（宮沢・NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班編著 2014 など）。よって本稿では、難波（2007:26）の定義を借り、「当該社会で非通念的かつ／もしくは非支配的と見なされる人々が、何らかのまとまりをもつものとして表象されることを可能ならしめているウェイ・オブ・ライフの総体」を暫定的にサブカルチャーと呼んでいく。

また、本稿における「都市空間」は、パークによる、「都市とは、たんなる物的装置や人工的構造物ではない。都市とは、それを構成している人びとの生活過程に関与している。つまり、それは自然の産物であり、とくに人間という自然の産物である」（Park 1925=2012:41）との古典的定義に立脚しつつ、「人々の生活過程と相関して変容する空間的広がり」と、ゆるやかに捉えていく。したがって、本稿では中野 BW の内部をも「都市空間」として考察していく。中野 BW は、地下 1 階から地上 4 階までの商業店舗部分に限っても、およそ 31000 平方メートルの床面積を有している [2)]。

（3）

次に先行研究と本稿との関係を検討しておこう。まず、都市空間とサブカルチャーの関係性については、古典ともいうべき、フィッシャーの「アーバニズムの下位文化理論」による把握が可能である。フィッシャーは、サブカルチャーを「下位文化」、すなわち「より大きな社会システムと文化の内部にあって、相対的に独特の社会的下位体系と結びついている一組の様式的な信念、価値、規範、慣習」（Fischer 1975=2012:135）の一形態として捉え、その発展をもたらすものを、「人口量」によって定義される「都市的であること」、すなわち「都市度」[3)]に求めている。「場所が都市的になればなるほど、下位文化の多様性は増大する」「場所が都市的になればなるほど、下位文化の強度は増大する」（ibid:136-138）。しかしながら、本稿の結論を先取りするならば、中野 BW を「サブカルチャー化」へと導いたものは、そうした「人口量」によって定義される「都市度」とは別の条件なのである。

さらに、東京の都市空間とサブカルチャーに照準した具体的な研究を検討しよう。まず、渋谷と広義の若者文化との関係を論じた先行研究としては、吉見（1987）がある。吉見は、1970年代以降の渋谷の街が、西武系資本のパルコによって〈劇場化〉されていったことを指摘し、またそこで若者たちが「見る・見られる」関係の上演に参与する様相を説得的に記述している。だが、中村（2006）が指摘しているように、それは「1980年代の渋谷」においてこそ有効な記述であった。本稿は吉見の分析と対象とする時代は重複しつつも、吉見が描き逃した東京・中野とサブカルチャーの関係性の様相を記述するものである。

一方、90年代半ば以降の秋葉原の電気街からオタク街への変貌について論じた森川（2003＝2008）は、「そこには不動産経営者や大企業資本によるような組織的な開発も不在」であり、「エヴァンゲリオンのスポンサーのようなメーカーの集合体が、秋葉原をオタクの街としてプロデュースしようとしたということもない。渋谷における東急や池袋における西武の展開のように、電鉄系資本によって大がかりな街のマーケティング開発が行なわれたようなケースとも、秋葉原のオタク街化は決定的に異なるのである」（森川2003＝2008:55）として、その変貌の要因をオタクたちの「趣味」に求めている。しかしながら本稿で明らかになるのは、そのような「趣都」・秋葉原とは異なる社会的条件によって規定される、都市空間とサブカルチャーの関係性の有り様である。

以下、本稿ではまず中野駅北口の戦後史を素描し（2章）、中野駅北口から中野BWへとつながる中野北口美観商店街（現中野サンモール商店街）の履歴と、中野BW建造までの履歴を辿り（3章）、中野BWの「サブカルチャー化」の社会的条件を検討していく（4・5章）。

２．中野駅北口の戦後史

本章ではまず、中野駅北口の戦中戦後について素描しておこう。1938年には、中野区の面積約470万坪（約1551万平方メートル）の内、15・5パーセントにあたる73万坪（約241万平方メートル）が国有地であった[4]。この国有地の占める高い比重の理由は、豊多摩刑務所、陸軍憲兵学校、陸軍中野学校[5]が区内の中野駅北口一帯に存在したからである。したがって、敗戦までの中野駅北口は紛れもない「軍都」であったと言えよう。

敗戦を経て、陸軍の有していた一帯は、占領軍に接収されることになる。その後、1949年の接収解除とともに警察大学校等が荻窪から移転し、使用していたが、この地域一帯が中野区の中心に位置するため、区民の間では早くから地元への払い下げ要求があった。昭和30年代に入ると、国の側からも大学校校舎の高層化を行ない土地利用の高度化がはかられるならば、東側の土地約2万坪（約66000平方メートル）を解放しても良いという意向が示され、具体的な利用計画の検討が区や国の側で進められた。その結果、1966年2月、現在の区役所一帯が区役所用地として中野区へ払い下げられることが決まり、1968年1月にはその東側に全国勤労青年会館（サンプラザ）が建設されることに決まった（『中野区民生活史 第三巻』:268-270）。かくして、区役所、警察、ランドマークというすべてのインフラが駅前に集約されるという、特徴的

な中野駅北口の様相が形成される。

このように、1960 年代に至り中野駅北口から「軍都」の痕跡は消去された。次に、中野駅北口一帯の商業を担う、中野北口美観商店街（現中野サンモール商店街）および中野 BW 建造の履歴を見ていこう。

３．中野北口美観商店街と中野ブロードウェイ

（１）

前章で、敗戦後に陸軍の有していた一帯が占領軍に接収されていたことは述べたが、それゆえに中野駅北口に闇市が形成された。その頃の様子は、中野の古老たちによる座談会で次のように語られている。

> 宇田川　中野駅北口はたちまちヤミ市の花盛りです。砂糖なんかいくらでも買えました。
>
> 司会　資料によると、当時のヤミ市は東中野、鍋横、新井薬師などでも開かれていたようですが、中野駅北口は何といっても一番有名で、中央線沿線では随一だったそうです。デパートより品数が豊富だといううわさでしたね。（笑）
>
> 吉村　床下に穴をあけまして、その中にアメリカのタバコを一杯つめておいて、それを売ってるヤミ屋もいた。（笑）
>
> 小川　今のサンプラザの所に二階建の兵舎があって、マッカーサー直属か何かの第一騎兵師団がそこに入ってたんですが、そこの倉庫に物資はギッシリつまってるし、米兵はパンパンを囲うし。（笑）良識の通用する世界ではなかったですね。
>
> 長谷部　米兵らは品物を盗み出しては売りさばき、員数しらべでそのことがバレそうになると倉庫に火をつけてごまかしてしまうのです。（笑）実にひどいものです。
>
> 小川　米兵が日本人にタバコを売りつけてるなと思って見ていると、次の日には同じ米兵が MP の帽子をかぶって偉そうに取り締まりをやっている。そういうところは実に割り切っているんだね。（笑）
>
> （中野サンモール商店街記念誌編集委員会 1989:70）

1948 年ごろから露天商の整理が強力に進められ、「中野北口美観商店街」として整えられていく [6]。1953 年には、巨大資本による百貨店の著しい拡大に対抗するために、中野区商店街連合会（区商連）が結成され、区内の商店街がまとまりつつ繁栄していく。その区商連の中で中野北口美観商店街は最も実力のある商店街の一つとして注目を集め、必要に応じて指導的な役割を果たした（中野サンモール商店街記念誌編集委員会 1989）。なお、こうした繁栄の背景には、1956 年の百貨店法の復活による、商店街の小売店の保護が在ったことを指摘しておく。

（2）

さて、その頃の中野北口美観商店街は、途中の白線通りまでしか伸びていなかった。そこで、昭和通り（現在の早稲田通り）まで貫通させるべく、商店街の有志の出資によって 1959 年に北口開発委員会が、翌 60 年には中野北口開発株式会社が設立される。だが、土地の買収に難航し、結局事業は東京コープ販売株式会社へ移譲される。するとその計画は、地上 10 階地下 3 階の大ショッピングセンターで、5 階以上は高級マンションとする、という膨大なものに様変わりしてしまう。「こうなってくると、今度は新しい不安が商店街を呑みこんだ。そんなデパートのようなものがすぐ近くに出来てしまったら、地元の商店街は客をとられてたちまち冷飯をくわされてしまうのではないか。北口開発のメンバーが余計なことをはじめたものだから、これはとんでもないことになってしまったではないか。一体、この責任をどう取ってくれるのか……と」（中野サンモール商店街記念誌編集委員会 1989:45）。

東京コープ販売株式会社の社長である宮田慶三郎は、中野 BW 建造のための地上げを 1 ヵ月でやってのけるほどの敏腕の持ち主であり、また建築基準法改正の間隙を突く形で、顧客に売る「床面積」を最大限に確保するなど、「企業の採算」を追求して、1966 年に中野 BW を完成させた（平松 2011）。それに対抗して、北口美観商店街では、大理石のプロムナード化およびシャンデリアを設置した。だが、中野 BW によって、中野駅から早稲田通りまで貫通し、中野駅北口周辺が一つの巨大な商勢圏となったことで、もはや中野区内の他の商店街を競争相手とするのではなく、新宿を最大の競争相手とするようになっていった。この頃の様子は、中野 BW 住民の座談会で次のように語られている。

> E　駅を降りて入ってまいります道がきたない商店街でしたよね。一番目立つのがパチンコ屋で、あとは小さいお店ばかり。最初はこんな所を子供が歩いて大丈夫かしら、と心配したりしたものです。
>
> F　あの頃は北口は値打ちがなくて、南の方が 1 等地でした。南口の角に不二家さんがございまして、あそこが 1 等地ですって言ってました。お店も南口の方が多くて、こちらは本当によごれた通りでした。こちらがきれいになったのは、ブロードウェイが出来てからですね。（ブロードウェイ管理組合 1984：29）

前章と併せて考えるならば、1960 年代の中野駅北口で進行していたのは、「軍都」の痕跡の消去と、「資本の論理」の流入による地域経済の書き換えという事態であった。

4．サブカルチャー化を導いた陳腐化と凋落

（1）

さて、既に 1 章でも述べたように、この中野 BW は、当初は「高級マンション」として売り出されており（青島幸男や沢田研二が住んだことでも知られる [7]）、また「流行の最先端のファ

ッションビル」として繁栄する。ではその中野 BW は、いつ、どのようにして「サブカルチャー化」したのであろうか。その端緒は明らかである。1980 年のマンガ専門古書店「まんだらけ」の出店と、その拡大である。しかしながら、「流行の最先端のファッションビル」であった中野 BW 内で、なぜマンガ専門古書店の「まんだらけ」が拡大出来たのであろうか。「まんだらけ」の社長である古川益三は、中野 BW に「まんだらけ」を出店した当初に、他店舗との軋轢や摩擦が色々出て来て、時にはあからさまな嫌がらせを受けたことを述懐しているのである。

> 当時私の意識には、発展・拡大・進化しかなく、調和や安定という心の広さは少なかった。しかしこの考え方は、絶頂期をとっくに過ぎたブロードウェイ商店街にとっては、大事なカンフル剤になる筈だったが、過去の栄華を忘れられず、守りの姿勢、客を忘れた商売に慣れてしまった店主やオーナーには、ただうるさいだけの存在に見えるようだった。（古川 1995:118）

だが、その後、なぜか幾度も中野 BW 内の空き物件が古川のもとに巡ってきて「まんだらけ」が拡大していくのである。本稿では、これはただの偶然ではなく、80 年代から 90 年代にかけての中野 BW およびサンモール商店街の社会 - 経済的条件によってもたらされた必然であった、という診断を下す。

（2）

その社会 - 経済的条件とは、端的に言ってしまえば、中野 BW およびサンモール商店街（北口美観商店街が 1975 年に名称を変えていた）の陳腐化と凋落である。まずは中野 BW のほうからみておこう。

中野 BW にブティックを出店していたある人物は、人気の陰りを察知し、1970 年代後半に、中野 BW の大幅なリニューアルを提案したという。

> 新宿サブナードが西武新宿線に抜けるという計画があったから、ブロードウェイのお客さんがそっちに流れることは自明だった。1977 年には、その西武新宿に『ペペ』という新しい商業施設までできるらしいと。JR からのアクセスもいいし、これは中野駅まで客足が伸びないだろうなと思ったね。だけど、変えなきゃいけないっていくら話しても、地元の人の耳には届かなかった。『なぜ、これだけお客さんの入っているビルを変える必要があるの？』って。（『TO mag 中野区』:37）

そして 80 年代半ばの中野 BW は、例えば泉麻人にこう記述されることになる。

> ブロードウェイはオープンして二十余年が経とうとしているのにこれまでほとんど改装

がなされていません。（中略）その二十余年変わり映えのしないこのビル内の店舗には一つの特徴があります。それは、ファッションブティックにしても飲食店にしても、みなコンセプトが甘い、という点です。

たとえば飲食店街は“お好み焼の店”“カレーの店”“京風うどんの店”“ショーウインドーにコーラフロートとプリンアラモード、パフェ各種のレプリカを飾った喫茶店”“バニラとチョコのシマシマになった、どろどろですぐ床にベチャッとおちるソフトクリームを売るスタンド”“ミキサーで日凍の氷漬けメロンを砕いた生ジュースを出すコーナー”などによって構成されています。そして、ファッションブティックは、“ラルフ・ローレンやブルックスに似たB級メーカーのセーターやシャツ、ジャケットを並べたメンズ”とやはり“マドモアゼルノンノンを真似たそれっぽいワンピースなどを並べたレディース”などが目につきます。さらに、ニセ MA1 とニセアーミーシャツを並べた軍服屋に、リーバイスでもリーでもないGジャンに漂白ジーンズなどが積みあげられたショップ、ちょっと端っこのほうにいくと趣味の古銭屋さんがあったり、そうかと思うといきなり歯医者さんや眼医者、床屋が出現したり、二階にあるばかでかい明屋書店を除いては、どのジャンルの店もB級でかためました、という感じです。

四国のファッションビルにもコムデギャルソンやピンクハウスなどが入ってくる時代に、ここまで B 級でかためとおしてる姿勢はある意味で立派であります。（泉 1985＝1988:140-141）

このように、1980年代に中野BWは陳腐化していたのである。また、中野BW20周年の記念冊子『THE BROADWAY BOOK』には、「警告」と題して、1966年には340店あったBW内の店舗数が、1985 年には 117 店に「激減」していることが記されている（『THE BROADWAY BOOK』:13）。すなわち、1980年代に中野BWの陳腐化と凋落が生じていたのである。

岡崎京子の漫画『東方見聞録』（「ヤングサンデー」1987年第1号〜第14号掲載）は、この頃の中野 BW を描いている。主人公の男子高校生がガールフレンドを連れて、「で、ここが中野ブロードウェイ。1、2、3階はまあフツーのアーケード街なんだけど……」「4階はちょっとさびれててゴーストタウンぽくておかしいんだ。」「ホラ、大人のオモチャ屋とかあんだ。」と案内するが、ガールフレンドからは「私、あんましこーゆーとこ好きじゃない。」と言われてしまい、「（変でおもしろいとこだと思うんだけどなあ。）」と頭を掻くのである（岡崎 2008:63- 64）。

（3）

同時期には、サンモール商店街でも陳腐化と凋落が進行していた。1982〜83年に中野区で実施された区民モニター調査の結果によれば、中野区内の商店街のうち、「魅力度」[8]が最も高かったのが、サンモール商店街やBWを含むブロックであったものの、票数は過半数に届かない48％であった[9]。さらに1986年に実施された「区民の買い物動向に関するアンケート調査」に

よれば、サンモール商店街や中野 BW が含まれると思われる中野駅周辺で「オシャレ着」や「時計、眼鏡、カメラ」を買う区民の割合は高くはなく、それらはもっぱら新宿で購入されている（表 2：中野区商店街コミュニティ推進協議会、1987、「地域と共にある新しい商店街づくりに向けて」:69）。

商品別購入場所（商店街）

商品別に主に買物をする場所（地区）はどこでしょうか。それぞれについて１つだけ○をつけてください。

N＝703	①地元商店街	②中野駅周辺	③高円寺	④新宿	⑤荻窪・吉祥寺	⑦渋谷	⑥都心（銀座・日本橋）	⑧その他	NA
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(1)食料品	80.7	10.5	2.8	1.6	0.1	0.4	—	3.8	—
(2)日用品	66.6	13.7	2.7	9.0	0.9	0.7	1.3	5.3	—
(3)オシャレ着	6.0	11.2	2.3	54.8	2.7	3.6	9.8	9.0	0.7
(4)医薬品・化粧品	64.3	15.8	3.3	7.3	0.7	0.6	0.6	6.7	0.9
(5)家庭電気製品	38.5	9.5	4.1	13.7	1.3	0.9	3.3	27.2	1.6
(6)時計、眼鏡、カメラ	12.1	13.5	2.7	48.6	1.7	0.9	5.3	12.9	2.3
(7)レジャースポーツ用品	10.7	11.5	3.7	46.4	1.6	2.0	4.1	15.1	5.0
(8)家具	15.1	21.3	1.4	28.2	2.0	0.9	6.0	21.3	3.8
(9)家族同伴の外食	14.7	15.9	2.4	32.4	2.8	2.3	9.4	14.4	5.7

表 2

さらに、中野区全体の小売業商店数を見てみても、1980 年代～90 年代を通して、その数は下落している（表 3：東京都総務局統計部「商業統計調査報告」より作成）。

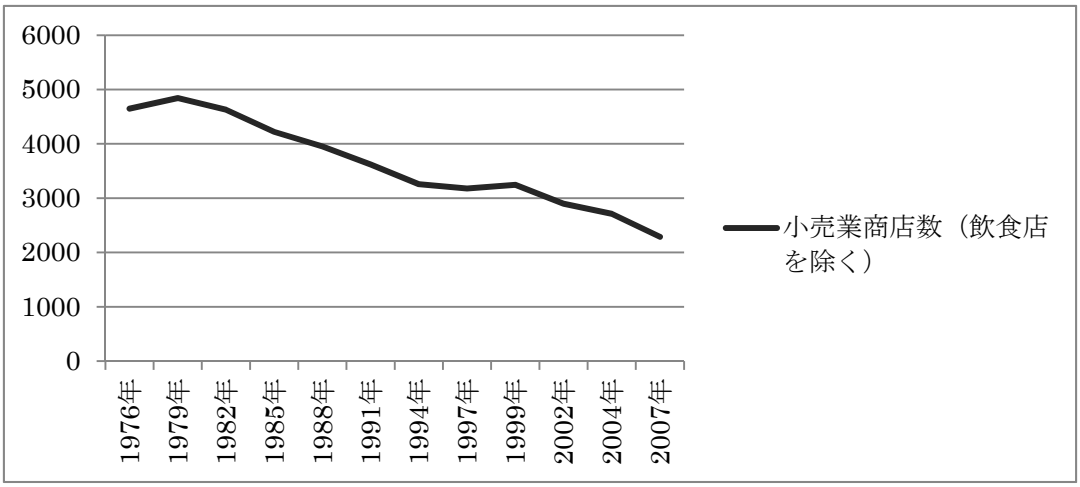

表 3

新（2012）は、1956 年の制定以来、商店街の小売店を保護してきた百貨店法が、改正および規制緩和されることによって[10]、1974 年以降、もはや法律による保護を受けられなくなった商店街が構造的に衰退していくことを指摘しているが、この中野サンモール商店街でも、その傾向は次のように知覚されていた。

> （中略）寂しいことが一つある。
> 戦前からこの土地に根差し、雑草のようにたくましく生き抜いてきた商人たちが多く世を去り、子供のころからなじんできた商人たちが次第次第に通りから姿を消していくことだ。
> 外部から、チェーン政策を掲げて進出してくる店舗がふえ、古い地元の商人がテナントに席を譲っていく。商店会の活動や地域の祭礼なども、それだけ寂しくなっていく。（中野サンモール商店街記念誌編集委員会 1989:53）

このように 1980 年代から 90 年代にかけて、中野 BW、およびサンモール商店街において陳腐化と凋落が起こっていたのである。そしてこの陳腐化・凋落ゆえに、マンガ古書専門店である「まんだらけ」およびサブカルチャーショップが中野 BW 内で拡大できるだけの空隙が生じたのである。すなわち、商店街の陳腐化・凋落こそが、中野 BW を――意図せざる結果として――「サブカルチャー化」したのである。中野 BW 商店街振興組合事務局長・金子義孝氏の次の発言は、本章の考察を裏付けるものである。

> ヨーロッパ的な超高級マンション・店舗からスタートして、しばらくは好調にきていたんですが、バブルがはじけてブロードウェイも景気が悪くなりました。そうすると商売を辞める人も出てくるし、お店の人も歳をとってきて世代交代が起こったんですね。そのタイミングで、28 年前に「まんだらけ」さんが小さいお店を開きました。それが当たってお客さんがどんどん来るようになって、次第にアニメやフィギュアといった関連の店が増えて今のような形が形成されていったんです。（「中野ブロードウェイの全て」『たのしい中央線⑤』:86）

５．中野ＢＷ内部の社会――空間的条件――

（１）

さて、上述のように中野 BW に 1980～90 年代にかけて生じた空隙に入り込んだ「まんだらけ」およびそれに追随したサブカルチャーショップは、中野 BW 内部で拡大していくことになるが、それを可能にした中野 BW 内部の条件を考察していこう。まず指摘しなければならないのは、中野 BW の内部において形成されていった、サブカルチャーショップ同業者、およびサブカルチャーのマニア - オタクたちのネットワークの存在である。例えば、古川（1995）は、

中野 BW に出店当初の「まんだらけ」が、古本マンガのマニアたちのたまり場となっていたことを語っているし、また古川は「まんだらけ」に来店する客の出店の相談に積極的に乗っており [11]、時には中野 BW 内での出店を勧めている。現在も中野 BW 内で 3 店舗を展開している雑誌専門古書店「TRIO」は、古川の勧めにより中野 BW に出店を決めたという（佐藤・川口編 2009:24）。

さらに、そこに集うマニア - オタクたちの形成したネットワークについては、リリー・フランキーが次のように証言している。

> 昔、ブロードウェイも半分くらいはテナントが入ってない状態でさ、そのシャッターの下りた道で、オタクたちがさ、トレーディングカードを交換したりとか、アニメのセル画を交換したりとかしてたよ。そこを歩くときなんかもうゲットーの中を歩くような、物凄い危ねぇところを通ってるって感じはしたよ。当時オタクっていうのは世の中から物凄い迫害されてたから（リリー・フランキー 2005:39）。

（2）

次に、中野 BW 内部の空間的条件を考察しよう。平松（2012）は、中野 BW の建築空間としての特徴を以下のように整理している。すなわち、建築基準法の改正による容積率の制限が中野まで及ぶ前に、高さ 31 メートル限度いっぱいの巨大な箱を拵えてしまう。この箱に「街路（ブロードウェイ）」を貫通させ、エスカレーター、エレベーター、階段などの機能を必要最低限ギュウギュウに詰め込む。そして、床をコンクリートブロックで 400 以上もの小さな店舗群に区切る。それらをバラバラに売る。転売が繰り返されるうちに権利関係が複雑化する。おかげで一つ一つの店舗が大きくなり過ぎず、中・小規模に保たれる。その中・小規模の店が個性を競い合い、空間が活性化する。（平松 2012:120）

図 1

事実、現在の中野 BW3 階の店舗マップを参照してみても（図 1：中野ブロードウェイ公式サイトより引用）、多様なジャンルの小さな店舗が密集しており、また、権利関係が複雑になっているがゆえに、「まんだらけ」や「トリオ」、「レコミンツ」といった複数の店舗を展開する場合は、離れたところに出店せざるを得ない様子が見て取れる [12]。

中野ブロードウェイの 350 を超える店舗がひしめく競争の激しい中、狭い店舗で生き残

るために、まず扱う商品の個性を際立たせる。成功の後の規模拡張に際しては、店舗一つ一つは小規模だから、横だけでなく、離れた場所にもジャンプする。隣り合う店舗の個性は互いに異なり、また廊下のジグザグで形が一定しないこともあって、巨大な建物の内部が一色には染まらず、モザイクのごとく多様性が守られる。（平松 2012:119）

このような空間的条件のもとで、「まんだらけ」、およびそれに追随したサブカルチャーショップは、80 年代後半から 90 年代を通して、中野 BW 内で多様性を保ちつつ、その数を増やしていくのである [13)]。

そして、1995 年頃から、中央線沿線文化を称揚する出版物が相次いで発行され、「中央線文化ブーム」が起こる [14)]。さらに、若者たちの、レトロなサブカルチャーへの志向の高まりも相俟って（三浦 2001:212-218）、中野 BW は「サブカルチャーの聖地」として人気を博していくのである。2001 年に、泉麻人は中野 BW を次のように記述し直している。

昭和 55 年、ブロードウェイ内の僅か 2 坪の店からスタートした“趣味の漫画の店”まんだらけ――は、いわゆるオタク世代のハートをがっちり摑み、その後館内にアメーバの如く、2 号店、3 号店……と増殖していきました。（中略）この店の成功によって、アニメ専門の CD 店、お宝アイドルグッズの店、菓子の景品や琺瑯看板などを並べた古雑貨屋……といった同類の店が次々と出店してきて、ブロードウェイは中央線沿線の「新神保町」のような様相を呈してきています。以前の“単なる B 級”から、“B 級文化”のデパートに変貌した、といっていいでしょう。（泉 2001:195-196）

６．結語

本稿では、中野 BW の「サブカルチャー化」の要因を考察してきた。中野 BW が、「流行最先端のファッションビル」から「サブカルチャーの聖地」へと変貌した要因は、1980～90 年代に生じた、中野 BW およびサンモール商店街の陳腐化・凋落とそれゆえに生じた空隙という社会 - 経済的条件であり、また中野 BW 内部の社会的ネットワーク、および空間的条件であった。

このような、社会 - 経済 - 空間的な諸条件により規定される都市空間とサブカルチャーの関係性の記述から、以下の意義が導かれる。まず、本稿の記述は、フィッシャーの「アーバニズムの下位文化理論」における、「人口量」のみに拠った都市とサブカルチャーの関係性の把握に対し、鋭く修正を迫るものである。また本稿は、「巨大資本による開発・プロデュース」や、「オタク趣味」に拠った、都市空間とサブカルチャーの関係性の把握を相対化するものでもある。すなわち本稿は、吉見（1987）が記述した渋谷や、森川（2003＝2008）が論じた秋葉原とは異なる、都市空間とサブカルチャーの関係性の有り様の記述である。そして本稿は、中野 BW に刻まれた、ポスト高度経済成長期の日本社会の一断面の記述でもある。

ただし、残された課題も多い。周知のように、フィッシャーの理論はその後、フィッシャー

自身の手によって、パーソナルネットワークの分析へと展開されており（Fischer 1982=2002）、またわが国の都市社会学においても、同様の方向で継承発展されている（松本 1992;2002 など）。したがって、本稿が扱った、中野 BW における都市空間とサブカルチャーの関係性の考察には、人々の生活史を含む、より精緻なネットワーク分析の接続が試みられて然るべきであろう。また、新宿西口において集合している中古レコード店や、高円寺における古着屋の集積[15]などの中央線沿線の文化との連続性および非連続性の中で、中野におけるサブカルチャーを検討する作業も必要であろう。それらの課題は別稿に譲ることにしよう。

【付記】

本稿は、カルチュラル・タイフーン 2014（2014 年 6 月 29 日於国際基督教大学）における口頭発表「都市の現在史―中野の社会学的把握のために―」に基づくものである。

【註】

1) 例えば、マイナビ（2014）では、秋葉原、池袋「乙女ロード」、そして中野ブロードウェイが、オタクカルチャーの「東京 3 大聖地」として紹介されている。

2) ブロードウェイ管理組合（1984）:61

3) 「「都市的」とは、人口の集中との関連でのみ定義される――ある定住地に凝集する人びとの数が多ければ多いほど、その場所は都市的である」（ibid:135）

4) 『中野区民生活史 第二巻』:267

5) 「陸軍中野学校は「諜報謀略の科学化」に対応するための要員養成所であるが、九段にあった愛国婦人会本部の別館を臨時教場として、昭和 13 年 1 月に開設された。中野に移ったのは 14 年 4 月からである」（『中野区民生活史』第二巻：267）。なお、現在は東京警察病院内の一角に記念碑が存在する。

6) 美観商店街とは、石川栄耀の構想・指導によるものであり、1948 年に東京都条例に基づいて 31 ヶ所の美観商店街が指定された（初田 2011）。この「中野北口美観商店街」はそのうちの一つである。

7) NBW 友の会編（2009）:60-64 などを参照のこと。

8) ①健康性、②安全性、③便利性、④選択性、⑤斬新性、⑥慰楽性、⑦話題性、⑧ファッション性の 8 項目で調査している。

9) 『グラフなかの』№25（1985 年 6 月発行）:7-8

10) 百貨店法は 1973 年に大規模小売店舗法へと変更されていたが、それが 83 年・91 年・93 年と、数次にわたり規制緩和されて行く。

11) 「この頃になると同じマンガの古本屋をやりたいという人がポツリポツリと現われ、色々相談をもちかけて来るようになった」（古川 1995:164）。

12) 1987 年 7 月から 2008 年 6 月までの中野 BW 内のテナントの変遷を分析した角田・鍛（2009）によると、「まんだらけ」のテナント数は、その 21 年間に 2 軒から 17.5 倍の 35 軒に増えているという。

13) 「中野 BW は開業当時より、店舗テナントを総括する大手デベロッパーが存在せず、地元の小規模な不動産業者がそれぞれ、独自にテナントを賃貸する形式をとっている。そのため、館内の所有権が複雑になり、まとまったスペースを確保するのが難しくなり、飛び火する形で店舗を構える店舗も多くなる」（NBW 友の会編 2009:65）。

14) 例えば、三善（1994;2000）や、『東京人』1995 年 11 月号「中央線の魔力」特集など。

15) 高円寺における古着屋の集積に関する研究としては、下村（2011）がある。

【文献】

新雅史.2012.『商店街はなぜ滅びるのか』光文社新書.

ブロードウェイ管理組合.1984.『ブロードウェイ自主管理 10 年のあゆみ』.

Fischer,Claude.S, “ *Toward a Subcultural Theory of Urbanism* ” ,American Journal of Sociology, Vol.80,No.6,1975,pp.1319-1341,University of Chicago Press.（＝2012.広田康生訳.「アーバニズムの下位文化理論に向かって」森岡清志編『都市社会学セレクションⅡ 都市空間と都市コミュニティ』日本評論社.）

———.1982.*To Dwell among Friends*. The University of Chicago Press.（＝2002.松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす―北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク―』未來社.）

古川益三.1995.『まんだらけ風雲録』太田出版.

初田香成.2011.『都市の戦後』東京大学出版会.

Hebdige,Dick.1979,*Subculture:The Meaning of Style*. Methuen&Co Ltd.（＝1986.山口淑子訳『サブカルチャー―スタイルの意味するもの―』未來社.）

平松剛.2011.「中野ブロードウェイ　制御不能都市の誕生③」『東京人』No.303.

———.2012.「中野ブロードウェイ　制御不能都市の誕生⑥」『東京人』No.306.

泉麻人.1985＝1988.『東京 23 区物語』新潮文庫.

———.2001.『新・東京 23 区物語』新潮文庫.

角田靖彦・鍛佳代子.2009.「テナントの業種の変遷にみる商業空間の変容―中野ブロードウェイにみる商店街の特性変化―」日本建築学会大会学術講演梗概集:1069-1070.

リリー・フランキー.2005.「リリー・フランキー　ロングインタビュー　ブロードウェイが巨大ロボットになって中央線沿線の古本を拾って歩いてる」『たのしい中央線』太田出版.

マイナビ.2014.『秋葉原・中野ブロードウェイ・池袋乙女ロード　東京 3 大聖地攻略ガイド 2014』マイナビ.

森川嘉一郎.2003＝2008.『趣都の誕生』幻冬舎文庫.

松本康.1992.「都市はなにを生みだすか―アーバニズム理論の革新―」森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア 2　生活・関係・文化』日本評論社.

———.2002.「アーバニズムの構造化理論に向かって―都市における社会的ネットワークの構造化―」『日本都市社会学会年報』第 20 号.

三浦展.2001.『マイホームレス・チャイルド―今どきの若者を理解するための 23 の視点―』クラブハウス.
宮沢章夫・NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班編著.2014.『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史』NHK 出版.
三善里沙子.1994.『中央線の呪い』二玄社.
―――.2000.『中央線なヒト』ブロンズ新社.
NBW 友の会編.2009.『のせすぎ！ 中野ブロードウェイ』辰巳出版.
中野サンモール商店街記念誌編集委員会編.1989.『サンモールの歩み』.
中村由佳.2006.「ポスト 80 年代におけるファッションと都市空間――上演論的アプローチの再検討――」『年報社会学論集』第 19 号.
難波功士.2007.『族の系譜学―ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社.
岡崎京子.2008.『東方見聞録』小学館クリエイティブ.
Park,Robert.E, 1984（初出 1925）,“*The City:Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment.*” In Robert E.Park and Ernest W Burgess(eds).*The City:Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*,University of Chicago Press.（＝2012.松本康訳「都市――都市環境における人間行動研究のための提案」松本康編『都市社会学セレクション I　近代アーバニズム』日本評論社.）
佐藤圭亮・川口有紀編.2009.『日本の特別地域⑦ これでいいのか　東京都中野区』マイクロマガジン社.
下村恭広.2011.「東京・高円寺における古着小売店の集積―大都市商業地域の更新における若年自営業者」『日本都市社会学会年報』第 29 号.
吉見俊哉.1987.『都市のドラマトゥルギー』弘文堂.
Willis,Paul.E.1977,*LEARNING TO LABOUR*.（＝1996.熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫.）

Web サイト
中野ブロードウェイ公式サイト http://www.nbw.jp/　（2015 年 5 月 03 日最終閲覧）

（つかだ　しゅういち　大妻女子大学・東京都市大学非常勤講師）